



第3章 大阪狭山市の歴史文化の特性

1. 大阪狭山市の歴史文化の特性

1. 大阪狭山市の歴史文化の特性

本市の歴史は、飛鳥時代^{あすか}に築造された狭山池を中心^{つむ}に紡がれてきた側面^{こうやさんさんけい}、高野山参詣^{こうやさんさんけい}に向かう人々が行き交ったこと^{かいどう}で街道・鉄道が整備された交通の要衝^{ようしゅう}としての側面^{しょうえん}、莊園開発^{しやうえん}・新田開発^{しんでん}・ニュータウン開発といった各時代におこなわれた開発により、新しい町と住民が誕生してきたという側面をあわせ持つ点に特色があります。また、江戸時代に当地に陣屋^{じんや}を構えた狭山藩^{さやまはん}の存在は、町の歴史と文化に大きな影響を与えています。

大阪狭山の文化は、町のシンボルである狭山池を取り巻く文化と、各時代におこなわれた交通網の整備や村落の開発で常に人々が行き交うことで取り入れられた文化が混在し、醸成されたものといえます。

本計画では、これらの点をふまえて、本市の歴史文化の特性を以下の4点に整理します。

- (1) 狭山池と池守田中家 —1,400年灌漑用水を湛える生き続ける文化財—
- (2) 高野街道・高野鉄道 —狭山に多くの人とモノをもたらした交通網—
- (3) 莊園・新田・狭山ニュータウンの開発 —生活文化を形作った三つの開発—
- (4) 狭山藩 —戦国大名の末裔によって持ち込まれた文化と教育の精神—



図1 大阪狭山市の歴史文化の四つの特性

- (1) 狭山池航空写真
- (2) 市内を走る南海電鉄高野線
- (3) 狭山荘の新開を伝える太政官符
- (4) 狭山藩の農兵が使用した防具類

（1）狭山池と池守田中家 —1,400 年灌漑用水を湛える生き続ける文化財—

飛鳥時代に築造された日本最古のダム式溜め池である狭山池は、現在もかんがい用水を湛える1,400 年間現役の生き続ける文化財です。各時代におこなわれた改修や江戸時代に池守を務めた田中家など狭山池に集う多くの人々によって多様な歴史文化が形成されてきました。

市域の中央に位置し、市のシンボルである狭山池は、現存する日本最古のダム式溜め池です。奈良時代に編纂された『日本書紀』『古事記』にも池の築造の記事があります。奈良時代の行基、鎌倉時代の重源、江戸時代の片桐且元など、歴史上の人物によって繰り返し改修がなされ、築造以来1,400 年以上経過した現在もかんがい用水を湛えています。現役の生き続ける文化財です。

一方で狭山池は、人々が集い憩う場所でもあります。昭和13年（1938）には、ほとりに「狭山池遊園」が開園して多くの人々が訪れました。途中閉園をはさみますが、平成12年（2000）「さやま遊園」として閉園するまで多くの人々が集いました。また、遊園中断中の昭和27年（1952）には、「狭山競艇場」が開場し、昭和31年（1956）までの4年間、モーターボートレースが開催されました。現在は都市公園として整備され、ウォーキングや散歩を楽しむ人々に利用されています。

また、片桐且元による狭山池改修の際に下奉行を務めた田中孫左衛門は、改修が完了した後も狭山に残り、江戸時代を通じて狭山池の池守を務めた池守田中家の初代となりました。池守田中家は狭山池に関する膨大な記録を集めて保存し、現在にその歴史を伝えています。

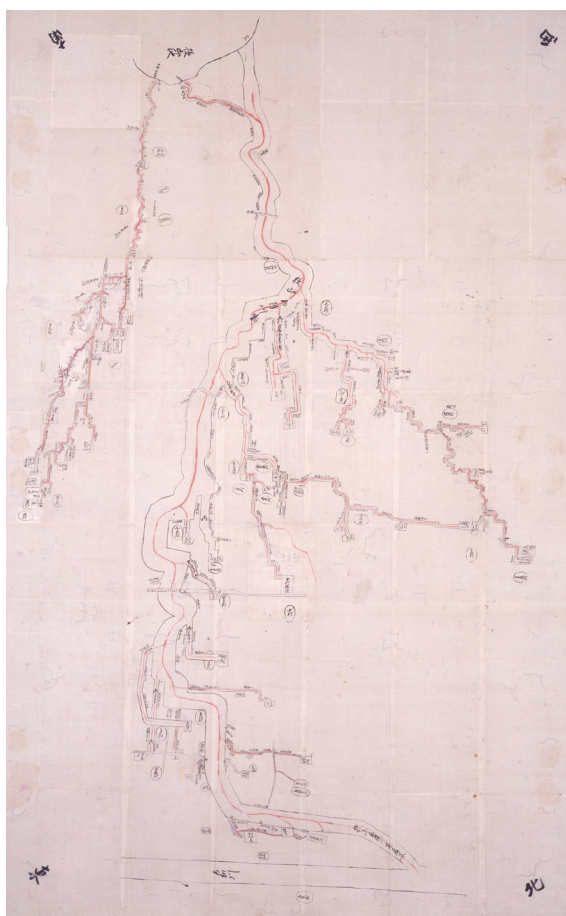


図2 狭山池水掛五十三箇村図（池守田中家文書）

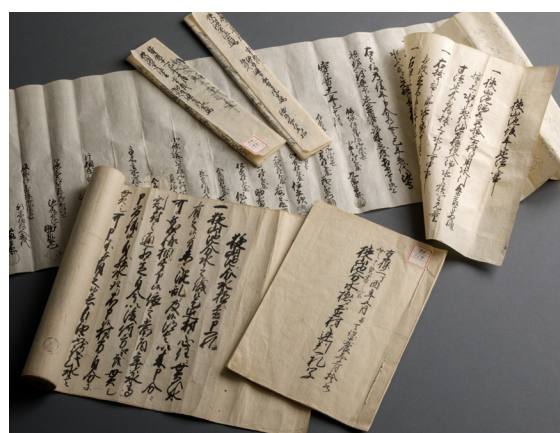


図3 池守田中家文書

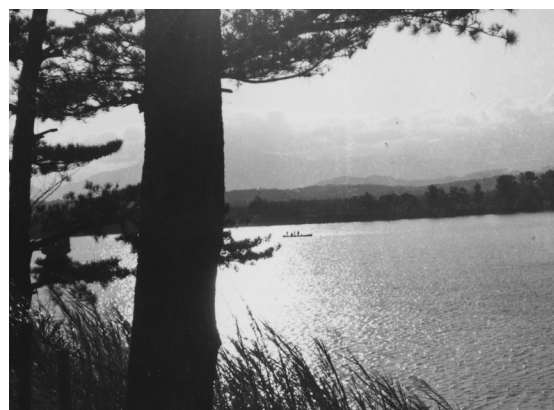


図4 昔日の狭山池北堤（昭和30年（1955））

（２）高野街道・高野鉄道 一狭山に多くの人とモノをもたらした交通網―

本市には高野参詣^{こうやさんけい}に利用された3本の高野街道^{こうやかいどう}と、明治時代に高野山への参詣客を見込んで敷設された鉄道が通っています。高野山をめざす人々が利用した交通網は、多くの人とモノを本市にもたらし交流が生まれることで、新たな歴史文化が形成されていきました。

平安時代以降盛んにおこなわれた高野参詣は、多くの人々を京・大坂・堺などから高野山へと誘いました。本市には、人々が高野山へ向かうのに利用した高野街道が3本（西・下・中）通っています。3本の街道を通して、平安時代から近代にいたるまで、多くの人とモノが本市を行き交いました。また、西高野街道^{にしこうやかいどう}には、堺市から高野山の女人堂^{にょにんどう}まで、全長13里の1里ごとに、距離を示した13基の里程道標^{りていどうひょう}が建立されています。これは、市内の茱萸木新田^{くみのきしんてん}の小左衛門^{こざえもん}と五兵衛^{ごへえ}が發起^{ほっし}人となり、安政4年（1857）に建てられました。

本市を南北に縦断する南海高野線^{なんかいこうやせん}は、明治31年（1898）に大小路駅^{おおしょうじ}と狭山駅間で開業した高野鉄道が前身です。延伸や合併を繰り返し、現在は大阪市内と高野山とを結び、高野山を訪れる人の移動手段となっています。



図5 かつての「狭山遊園前駅」
（現在の大阪狭山市駅）



図6 西高野街道（茱萸木地区）



図7 高野山女人堂へ十一里の道標

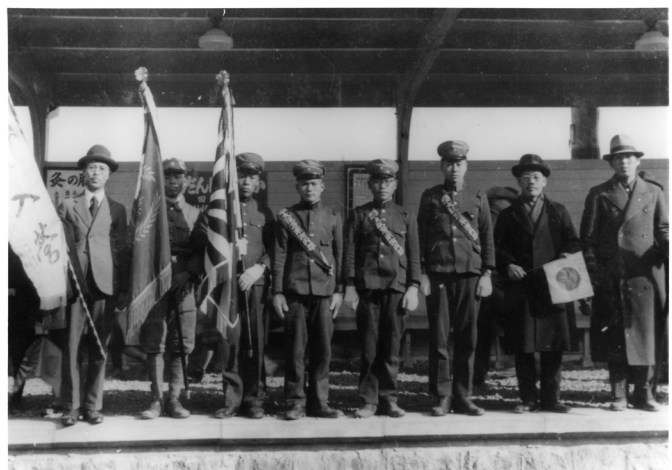


図8 狭山駅での入営見送りの様子

（3）荘園・新田・狭山ニュータウンの開発 ―生活文化を形作った三つの開発―

本市では、平安時代には狭山荘が、江戸時代には茱萸木・大野新田が、昭和時代には狭山ニュータウンが開発されました。こうして多くの人が狭山に住むことになり、現在まで続く生活文化が形作られていきました。

平安時代の後期には、公家や寺社などが所有する荘園が全国で開発されました。市域に位置した荘園である狭山荘は平安時代後期に開発が始まり、遅くとも鎌倉時代初期の建久2年（1191）までには成立していました。荘園には、役所や市場などの生活のための施設が設けられるため、狭山地域の人々に大きな影響を与えた開発であったと考えられます。

江戸時代の初期には、人口増加に対応して各地で新田開発がおこなわれました。市域では、寛永18年（1641）に茱萸木新田、元禄8年（1695）頃に大野新田が開発されました。大野新田の開発にともなって成立した山本新田、西山新田の二つの新田を加え、四つの新しい村が誕生しました。

狭山町時代の昭和36年（1961）に、市域南西部の丘陵に大規模住宅地（狭山ニュータウン）を新設する計画が立てられ、昭和44年（1969）には入居が始まりました。



図9 狭山ニュータウンの現地案内所（1967年）



図10 狭山ニュータウン起工式（1967年）

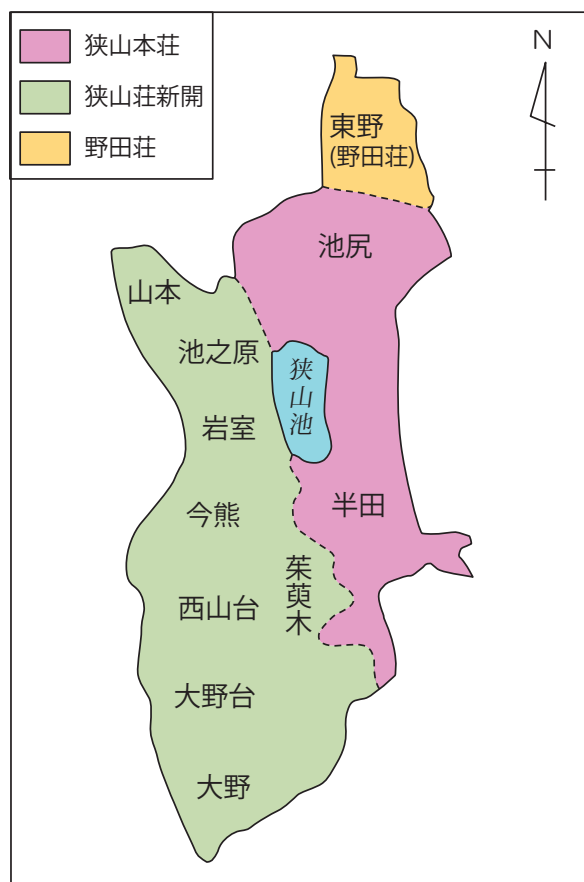


図11 狭山荘と現在の大阪狭山市の大字

（４）狭山藩 一戦国大名の末裔によって持ち込まれた文化と教育の精神—

戦国大名小田原北条氏の子孫によって築かれた狭山藩陣屋には、藩主北条氏をはじめ多くの武士が居住しました。北条氏とその家臣団によって持ち込まれた文化と教育の精神は、その後の本市の歴史文化に大きな影響を与えました。

戦国時代に小田原を拠点として関東を治めた北条氏は、天正18年（1590）に豊臣秀吉に降伏し、戦国大名としての歴史を閉じました。しかし、その子孫の北条氏規が豊臣家の旗本となり、北条家は存続します。氏規嫡男の氏盛の時代に大名に復帰し、慶長20年（1615）の大坂夏の陣ののち、2代藩主氏信が狭山池のほとりに陣屋を構築し、狭山藩が成立しました。北条氏は明治2年（1869）の廃藩まで狭山藩主を務めました。現在、陣屋跡は住宅地となっていますが、「狭山藩陣屋上屋敷図・狭山藩陣屋下屋敷図」に描かれた地割は今も見ることができます。

狭山藩には小田原以来の家臣も多く、関東から来た藩主と家臣団は、狭山に新たな文化を持ち込んだと考えられます。また、幕末に設置された藩校簡修館は、藩士の子息だけでなく、広く地元住民の子息にも門戸を開いたと伝わります。



図12 紅裾濃緋腹巻（個人蔵）

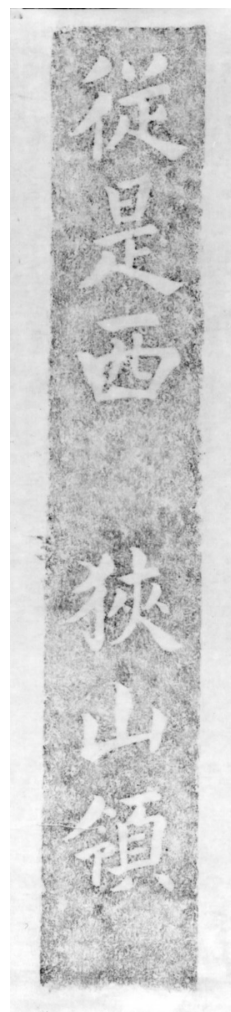


図13 狭山藩領を示す石碑の拓本